

最優秀

私の旅路は各駅停車

——応募テーマ 社会参加と自立——



福岡県

重度身体障害者授産施設訓練生 林 芳江

一、自分をみつめなおすことから

同じ道を通っても走って行くと気付かないものが、ゆっくり歩いて行くと、いろいろなものに気が付き、すれ違う人とあいさつをすることもできます。また現在のように交通機関のスピード化時代にあっても鈍行列車の旅を好む人もいます。きつとひと駅ごとにそれぞれの旅情を味わったり、温かい人情に触れられるからでしょう。人生もまたある意味では共通点があるのではないのでしょうか。

わたしの各駅停車にも似た人生は、苦しみも多いけどそれと同じように喜びと、思いがけない

発見や感動があります。けれどいくらマイペースで進んでも疲れてうずくまって居たい時もあります。わたしの場合、時おり自分の心と身体が喧嘩しているかのように思えることがあるのです。障害という脱ぐことのできない鎧よろいを着た身体は、なかなかいうことを聞いてくれず、分かっているつもりで自分に腹が立ちます。また身体にうつかり無理をかけ過ぎると、緊張が激しくなると余計思う通りに動けなくなったり、痛みだしたり、熱が出たりしてストライキを起こします。

そんな時「もつと手が動いたら」「ちゃんと歩けたら」あれこれできるに違いない。逆に「もう少し動けなかったら」できなくてもあきらめがつくの、などと身勝手なことを考えることがあり、そんな時は一番自分自身が嫌になります。しかしある日、星野富弘さんの詩画集を読んで、そんなことを考える時の自分は最低だと恥ずかしくなりました。そして自分の身体の大切さに気がつき、もつと自分を好きになるようにしようと思ったのです。

確かに体のスぺアがあるわけではなく、たった一つもらった命、この命はこの身体でしか燃やせません。身体と心をうまく調整し、例えば何度か脱線しても人生の旅をより素敵なコースに導くのはわたし自身なのですから。

二、自立という駅を探して

お盆休みを数日後に控え、忙しかった仕事も一段落したある日、机の引き出しを片付けていて何気なく手にした名刺整理ホルダーが、前よりも随分重くなっていることにふと気付きました。そこに綴られた名刺は、みなそれぞれに思いがこもったものばかりです。というのはこれらの名

刺は、誰かから頂いたものではなく、自分がレイアウトし、写植した版下で印刷されたものだからです。

私は現在、重度身体障害者授産施設・北九州フレンドの印刷科で写植の仕事をしています。写植と聞いてもちよつと耳慣れない方もいらっしゃるかもしれませんが、簡単に説明しますと、和文タイプとカメラを併せたようなもので、文字を一字ずつ印画紙に印字して現像すると文字が浮かび上がってきます。チラシ・文書物・各種伝票など様々な印刷物の版下作製に使われますが、フレンドの印刷科では名刺や葉書の印刷にも使います。名刺といえば、てのひらサイズの紙面に氏名・住所・職業等を表わした簡単なものなのですが、決まったスペースに各々字数の違うのを体裁よく納めるには意外と頭を使います。それに今日の複雑化した社会では自分をいかに印象付けるかは重要で、そのため、名刺のデザインも多種多様です。さらに名刺を一つのファッションとして持つ人もおり、そうなるユーザーの注文も様々で、レイアウトは大変ですが、デザイン関係の勉強がしたいと考えていたこともあるわたしにはやりがいのある仕事で、結構楽しんでます。けれど今のようにレイアウトまで任せてもらうようになるまでには、かなり努力してきただけです。

私の障害は脳性小児麻痺のアテトウゼ型、全身に不随意運動があります。未熟児で生まれ、障害児であることが判ったのは一歳の頃だったそうです。わたしには何人かの姉妹がおりましたが皆一歳の誕生日を迎えることができませんでした。それだけに両親の喜びと期待は大きかったです。しょう。なのに重度障害児の宣告をされた両親のショックはわたしには計り知れません。それで

も母はあきらめず、少しでも障害が軽くなるようにと、わたしを連れて方々の病院を巡ったり、マッサージに通ったりしました。

やがて五歳になるとリハビリのために北九州市の旧足立学園に入園し、そして約十年間親元を離れて暮らしました。その間、二週間に一度帰省日に下関市の自宅から迎えに来てもらうのが何よりの楽しみで、帰りにはいつも通る関門トンネルから抜けるのが待ち遠しく、反対に送ってもらう時はずっとトンネルが続けばいいのと思っていました。自分の寂しさ以上に親の辛い気持ちを察したのは随分後からで、今思えばその頃は甘えたい気持ちが先にたっていました。訓練の結果身辺処理と、どうにか歩けるようになりましたが、もっとやる気を出して訓練も勉強も努力しておけばと、今さらながら後悔する時があります。

リハビリも一段落した中学三年生の時に、長い間両親と別に暮らしていましたから、一緒に暮らしたいという願いがかなえられ、我がままと知りながら友達の多い北九州市の養護学校に通うために、高等部を卒業するまでの四年間の条件付きで、両親に下関から小倉へ引っ越して来てもらいました。その後三年間、毎日家から通学して、学校の帰りには母と夕食の献立の買い物をし父が帰るのを待って夕食をとにし、また休みの日には父と散歩をしたり、本当に夢のような忘れられない楽しい日々でした。

しかし、悪夢のように想像もまるで及ばなかったことが起こりました。大病をしたことがなかった父を病魔が襲ったのです。年一回の健康診断に引っ掛かり即入院、医師に呼び出された母が聞いて来た病名は癌でした。直ぐに摘出手術をしましたが既に手遅れで、抗癌剤投与の治療を病

院で続けましたが、この時、母は病状をすべて隠すことなくわたしには話してくれました。幸せな生活が一気に崩れていくのを感じ、目の前が真っ暗になり、初めは真実を率直に認められなくて、いえ、認めるのが怖くて「今起こっていることは、自分には関係のないよその家庭のことなんだ」と思いたい気持ちでした。

しかし、現実逃避や落ち込んでいる余裕さえすぐになくなっていました。父がまだ若かっただけに癌の進行は速く治療の成果はほとんど現れず、医師の予想さえつかないほどの速さで癌は進行しました。毎日母は朝から夕方まで看病に行き、こちらには親戚も頼れる人もなく、一人家に残されたわたしは、穏やかな世界から急に嵐の中に放り出されたように何をどうすればいいのか分からず、困ったのはいうまでもありません。今までどんなに甘やかされていたかひとごとを感じました。見舞いに行く度にやつれ、苦痛にさいなまれる父、それを看病する母のほうが倒れるのではないかと見ていられない様子なのに、自分のことすら満足にできない自分がはがゆいばかりか情けなくてたまりません。おりしもその時わたしは高等部三年生になって、卒業後の進路を決めなければいけない不安な時期だったのです。父のベッドの側で、「父さんお願いだからわたしたちをおいて逝かないで」と泣き叫びたかったのに、最期まで父には胃潰瘍だから治ると隠し続けていたので何も言えず、将来のこととも相談できずじまいとなりました。

入院して三か月も経たない六月のある日の夜明け前、病院から「少し容体が悪いけれどそんなに心配要らない」と連絡があり、母は直ぐ行きましたが、わたしは夜明けを待ってから行きました。病室に入ったわたしの姿を見た途端父は嘘のように容体が急変し、蘇生治療も間に合わず、

そのまま帰らぬ人になったのです。この日がくることは想像していたものの、突然にやってきたので覚悟する間もなく、しばらく茫然としている処へ、お世話になった看護婦さんが出勤してきて、「お父さんきつとあなたを待っていたのよ」と言われ、急に力が抜けて、堰を切ったように涙が出て号泣しました。入院以来うわごとのように家へ帰りたいたいと言い続けた父の悲しい帰宅、そして慌ただしく葬儀は行われ、幻覚を見るかのうちに父をおくりしました。一緒に暮らした期間は短かったけれど、父から叱られた記憶はなく、どこまでも娘に甘い父でしたし、わたしは最期まで限りなく我がままな娘でした。

やがて一週間が過ぎ、親戚の人達も帰り、弔問客も少なくなると、静かになった家に母と二人まるで孤島に取り残されたように、先行きの不安と、改めて永別の深い悲しみが襲ってきました。しかし、悲嘆に明け暮れるわけにはいきません。学生時代最期の夏休みが迫っており、久し振りに登校すると、学校では進路決定の参考にする職場実習の話題で一杯です。もちろんわたしにも他人ごとであるはずがなく、実習先を決めなければなりません。

ほんの三〜四か月前までは、自分の将来に関しては比較的のんびりと考えていました。「わたしは障害も重いし、体力もないから、学校の選択科目で習っている和文タイプを生かして、ゆつくりできる仕事をしながら、何か趣味に添った生きがいを探していこう」と、真剣に考えていたつもりでも後から顧みれば安易に構えていたのです。けれど大きな支えを失って必然的に考えは変わります。なんとか自分の力で生活していかれるようになりたいと、初めて強く自立の意思が目覚め、働く意義の概念が、生きがいを求めるものから、少しでも実益を求めるものへと変わり、

いちはやく職を身に付けたいと考えました。

幸いにも市内に国立の身体障害者職業訓練校がありました。そこは軽度障害者しか受け入れないと聞いており、進路としては考えませんでした。思い切つて実習してみることになりました。クラスメイト五人と一緒に十日間の体験入校が許可され、七月の暑い陽射しの中を通いました。スクールバスのように学校の前まで送ってくれるわけではありません。陽射しの強さがいつもの数倍にも感じられ、訓練校に行くだけでくたびれてしまい、前途多難です。実習は印章彫刻科・洋服科・軽印刷科・製版印刷科を順に巡りました。わずかでも自分の可能性を見出だそうと一生懸命でしたが、気持ちだけではどうにもならず実際の作業を体験させてもらうよりも、ただ説明を聞くだけになってしまいがちでした。

そんな状況の中、軽印刷科を実習した時初めて写植という仕事があることを知り、写植機の前に座った最初の日でした。和文タイプに少し似ているけど、はるかに大きく圧倒される写植機、文字が写る原理を聞いただけで非常に興味をそそられ、これならばもしかしてという思いがよぎったのです。それなのに担当の先生からは、「あなたには訓練校に入ることも写植も無理です。もしもどこかで訓練をして写植が打てるようになったらわたしのところへ見せにいらつしやい」とはつきり言われました。先生の言葉に失望するよりも悔しくて、その反発心が後々まで、更にもっとも、写植をあきらめなかった陰の支えになったことを明かします。

十日間の実習の総合判定でもやはり不適性の評価をされ、一度はあきらめかけましたが、駄目でもともとの覚悟で受験した結果、思いがけず第一希望の製版印刷科に合格しましたけれど最初

は本音をいえば合格を素直に喜べない気持ちでした。一年間の訓練期間中他の人について行けるかどうか怖くて不安な心を押し殺して、開かれたチャンスに賭けてみる覚悟を決めました。訓練校で過ごした一年は職業訓練だけでなく、生活面や人間関係などあらゆる勉強をさせて頂きました。辛くて思わず涙が出てきたことも幾度もあり、挫けずにいられたのは、訓練校で知り合った友達の友情があつてこそです。写植の基礎技術と一緒にたくさんの貴重な思い出をもらつて終了式を迎えました。

その後一度は志望通りに福祉工場の完備された施設へ入所でき、やる気満々、希望一杯で出発したのもつかのま、現実はやはり厳しく、写植課へ配属の願いはなかなか聞いてもらえず、他にもいろいろトラブルや描いていた理想とのギャップ等があつて挫折感が次第に高まり、悩んだ末そこを辞めました。父を亡くして以来夢中で突っ走って来て壁にぶつかった衝撃は大きく、重度障害者がいかに不利かを認識させられ、一時は心がすさんでいました。

再出発のつもりでここ北九州フレンドに来たのが五年前のことです。久し振りに写植機の前に座ると嬉しくて、やる気が湧いてきました。当初はわたしの障害の状態を見て、職業指導の先生は写植をさせるかどうかためらつたように感じたのは思い過ぎだったのでしょか。懸命に練習していくうちに少しずつ仕事もらえるようになりました。本番の仕事と練習を積み重ねて、徐々に難しいものへ、仕事の種類も表物類・文書物・チラシ・葉書や名刺などと拡がり、印刷の受注も増え仕事の量も多くなつていき、自分の力が伸びるのと仕事が多くなるのが競争をしているかのようにして今日までやってきました。特に忙しいのは学期末と年賀状の印刷が重なる年末

です。忙しさが重なると、座ったままの前傾姿勢で、しかも手の震えを押さえるために余計な力が入りますので、長時間打つとくたくたになります。疲れが重なると仕事を投げ出しくなりませんが、自分が打った版で印刷された年賀状がお客さんの手に渡り、やがてお正月には全国各地に届くだろうと想像すると何だか不思議な気分になり、仕事ができる喜びと重なって、頑張る勇気が湧いてきます。

三、ノーマライゼーションに夢をつないで

今も自立の道を探しながら授産を続けるなかで最近思うことは、自立という一つの言葉は、個々により捉え方もその形態も非常に違います。わたしにとって一番良い自立の形とはなんなのかということなんです。ここに居る限りは授産生であることに変わりなく、現在のように少しずつ仕事をしています。職業とはいえないと思います。何かのアンケート等で職業を書く欄があると複雑な気持ちになり困惑します。就職したいのはやまやまですが、通勤の問題や自分の能率を考えればなかなかですし、実際求人広告を見て会社を訪ねた時も、職能を判定されるより先に障害の状況を見て断られました。現在の仕事を続けたいと思えば、今のところここで頑張るしかないようです。確かに施設に入所していれば生活に困ることもなく、楽に暮らして行かれます。けれど言葉では言い表せない矛盾や窮屈さを感じるのはなぜでしょうか。

三年程前友人に誘われてボランティア講座を初めて受けた時、ノーマライゼーションという言葉聞いて、日頃感じる疑問を解く緒いとぐちを見つけたような気がしました。わたしたちは様々な面で

金銭的あるいは物質的に援助を受けており、それは他ならぬ皆さんの税金から出たものです。感謝の気持ちは決して忘れてはなりません、お金や物で心まで満たされないと思うのはわたしだけではないはずです。

ある日、ボランティアサークルのなかまと一緒に体験学習で街に出てみる機会があり、商店街の一角のガラス細工の店の前に足を留めて、車椅子に乗っていたわたしに介助してくれていた人が、「わあーきれいな、お店の中に入ってみようか?」といってくれたのですが「うーん、入りたいけど、通路が狭いでしょ、品物にぶつかったり触っても壊したら大変。だからこんなお店には入らないようにしてるのよ」と何気なく答えて通り過ぎました。それがわたしがつくに忘れた頃になって、あのときの言葉が彼女の胸に深く残っているのを知りました。入りたいお店に自由に入れない事実があるなんて初めて知ってショックだったと言い、それからは個人で旅行しても街の様子や設備に気を留めて、話をしてくれます。

交通機関・路上の段差・店舗の造り等まだまだ外に出れば障害者にとって困ることに多々行き当たります。不便だから出て行かないのではなく、不便だからこそ多くの人に現状を見てもらい、考え、一緒に改善の努力をしよう必要性を、あのことをきっかけにして強く感じました。確かに施設や家の中では障害を隠すことも要りませんが、外では人目が気になるし迷惑を掛けることもあります。でもそれを恐れていてはお互い進歩できないと思います、やはり辛い経験も避けられません。

わたしは普段は寮生活ですが、週末には一人暮らしの母の元へ帰ります。わたしの歩き方は、

自分が鏡に写して見てもぞつとするほど不安定ですから、知らない人が見ればさぞ驚くでしょう。なのにもいつも西鉄バスで往復しますから様々な出来事に出会います。こんなことがありました。

冬の寒い日、土曜日に仕事をやり残したまま帰宅し、月曜日にはどうしても帰らねばならない時、昨夜からの雪、朝には積もっていました。玄関先でしばらく空を眺めていたものの、心配する母をなだめ自分も不安ながらに腰を上げました。途中乗り換えのバス停で待つ間に足は冷え感覚がなくなるし、雪は予想に反しひどくなるばかり、二、三十分遅れて来たバスに乗って目的のフレンドが近付くほどに雪は深く、この目を疑うまるで別世界。通常はバスを降りてからフレンドまでわたしの足で十五分、でもこの日はそんなに歩けるはずがないので、運転手さんをお願いしフレンドの直ぐ下の道に降ろしてもらいました。一步踏み出しただけで、履いていたショートブーツがすっぽり埋まり、間から雪が入って来ます。フレンドまでの緩い砂利の坂道は雪で境目が分からず、ただ一台の車が通った跡をたどって進む途中転んで体半分埋まりました。普段でも人通りの少ない道、なおさら人の姿は全くなく、「このまま動けなくてだれにも気付かれなかったら……」と想像したら恐ろしくて、無我夢中ではいずって、やっとフレンドの寮に着いたときは頭まで雪まみれ、お昼のニュースで何十年振りかの記録的な大雪と耳にしました。今もってこの日の記憶は鮮明で、この経験は九州では滅多にできない貴重なもので忘れられません。

月曜日に早起きし二時間かけてフレンドに戻るのは、正直いって億劫な反面、通勤の人々に混じっていると「自分もこれから仕事をしに行くんだ」と実感が湧く時でもあります。朝は身体の動きが悪く、特に体調の悪い時はバスのステップが高くてなかなか上がれません。最近と同じバ

ス停から乗る一人の女性がいつも介助して下さい、またバスの運転手さんも気を遣いとても親切にして下さいます。全く知らなかった人なのに、さり気なく自然に手を貸して下さいるので安心して乗ることができます。これらの人の優しさに触れて感じることは、人間は誰も皆優しい心を持っているのに、恥ずかしかったり照れくさかったりで正直に気持ちを表わすのが下手なのかもしれない、ということですよ。もしも皆が素直に優しさを表現できたなら、ボランティアという言葉は使わなくてもよくなるかも知れないし、さらにお互いが誤解や無知や遠慮によって生じた心の壁を取り除き、同じ人間として心を通わせていくことが、これからノーマライゼーションへ向けての大きな力ではないでしょうか。今参加しているボランティア活動では障害を持つ人とそうでない人が共に生きて行く努力をし、様々な問題解決に向けて運動しており、わたしも少しでも何かできればと考えています。

これまでに知り合った友人や先輩達も障害を乗り越えて、形は違ってもそれぞれの幸せを一生懸命に追い求めています。わたしにとっての幸せとは、まだ具体的な方向は決まていませんが、将来への希望を持ち続けることが、優しく時には厳しく育て慈しんでくれる母への感謝と、自分の幸福につながるものと信じます。これから未来に向かって、わたしたちを含めすべての人々が希望を持ち続けられる社会になることを願っています。

選
評

重度身体障害者の自立への強い意志が、授産施設での写植の仕事を可能にした感動的な記録です。誕生後の病院めぐり、リハビリ、養護学校生活、父親の死、身障者訓練校での挫折など劇的ともいえる生活の展開の中で支えになったのは、強い意志と周囲の人たちへの信頼でした。「脱線しても人生の旅をより良い方向へ導くのは私自身」「私の旅路は各駅停車」という経験から生まれた言葉は、多くの人にその生き方を問いかけます。

(縫田 曄子)

林 芳江 はやし よしえ

昭和三十八年生まれ 重度身体障害者授産施設訓練生(身体障害者手帳第一種一級) 連絡先 福岡県北九州市